
夢の生まれる場所、心龍の目覚め

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の生まれる場所、心龍の目覚め

【Nコード】

N0054F

【作者名】

雨月

【あらすじ】

親戚の木曾家にやってきた天道時雨。転校した高校でも友人が出来、日々が普通だった。だが、彼が来た時点で既に異変は起こっており、渦中にいた時雨は一人の大事な友人と二度と会えなくなってしまう。（第一話～第十話）

プロローグ／第一話 さあ、はじめようか物語のプロローグを（前書き）

さて、いよいよ？ 始まりました。はじめまして、雨月といいます……
……もつとも、知っている人もいるとは思いますが……いや、知らない人のほうが多いかもしれませんね。まだ、第一話ですので話が見えてこない………ということもあるかもしれませんが、そんなときは教えてくれると非常に助かります。雨月の小説の半分は読者のメッセージや感想で出来ています。

プロローグ／第一話 さあ、はじめようか物語のプロローグを

プロローグ、

比較的大きめの日本家屋。

年季の入っているその家の門の前に一つの軽自動車動きを止める。年季が入っているのかところどころから黒い煙を吐き出しているのだが、元氣翼噴出すところを見るとまだ走れることを自己主張しているようだった。それに、ところどころに修理や改造されたような後が多々見受けられる。そして、そんな車が完璧に動きを止めてがちやりという音が聞こえてくる。

「……………」

後ろの扉を開けて出てきたのはボストンバックを肩にかけた十七歳ほどの少年だった。

あたりをきよきよと眺めた後に車のほうを振り返って手を振った。

それを合図にしたのか、車の運転席に乗っている人物はクラクションを一回だけ押してから再び黒い煙を上げている車のエンジンを入れて田んぼの道を去っていく。

制限速度を見事に振り切った走行でこれまで毎回毎回それを見てきた少年はあの車がここに来る前のように警察に見つかからないかひやひやしたが少なくとも彼が見ている間は警察が張り込んでいるという様子はなかった。山道のカーチェイスほど恐いものはなかった。

あれは心臓がギブアップをしても情状酌量の余地があると彼だっておもっている。

「……………」

砂埃と今にも壊れそうな……ねじが足元に落ちていることに気がついたがどうしようもないので黙ったままだった……音を響かせて去っていった車に不安そうな顔をした少年は何度かためらうようなそぶりを見せて遂に後ろ髪をひかれることなく潔く呼び鈴を押し

た。無論、先ほどのことではなくこれからのことである。呼び鈴は最近つけたのかまだまだ真新しく汚れなどは確認されない。しみじみとそれを眺めているとすぐに玄関をガラガラと開けるような音が聞こえてきて少年の目の前にある門が開けられる。

現れたのは着物を着た女性だった。

見た目はとても若く感じられ、物腰も上品そうである。

しかし、彼の母親と顔がそっくりなのできつと怒ると非常に恐いのだろうと彼はおもって頭を下げた。彼としては毎朝毎朝叩かれて起こされているので双子である目の前の人物に会うのは久しぶりではない気がしないでもないのだがそれでも、久しぶりに会う。それこそ五年ぶりぐらいにはなるだろう……彼の母親は怠惰で料理も作らないのだがこっちは料理の本にも何回か載っていた気がする。

少しの間思い出話をする……といっても、先ほどの車のことぐらいだったが……と、二人はそのまま門の内側へとはいっていった。そして、その後に残ったものは静かな田舎の春の風だけだったとおもわれたが……彼にまつているものは確実に彼の人生をおかしな方向へと直線的に進めてくれるというこの町のおかしな話だった。

第一話、

「ふう、疲れた……」

新しく僕の部屋となった部屋をちらりと一瞥する。まだまだ封を切られていないダンボールが今か今かと開けられるのをまつていることだろう。

しかし、僕はダンボールを開けることなく既に運ばれてきていた机の椅子に座って今日あったことを思い出していた。

「あ……お前らもう知っているとは思うが、今日この教室に新たな仲間がくることになった。天道時、挨拶してやれ」

そういつて先生は僕のほうへと視線を向ける。

廊下にいたところから考えていた台詞を口の中で反芻すると頷いて口を開いた。こういうときは後ろの掲示物に集中してしゃべるのがコツであると転校が多かった以前いた学校の先輩が僕に教えてくれた。その後、その先輩はすぐに引越してしまったが……噂ではなにやら黒いことをしていて警察に目をつけられたらしい。

「……………葉野間高校から転校してきた天道時時雨です。これから、よろしく願います」

僕がそう言うのと同時に朝のHRを終了するチャイムが鳴り響く。一気に教室中は騒がしくなり、それを制して先生は言った。

「じゃあ、各自一時間目の大掃除に備えておくように！」

今日から二年生で、本日のこの高校の行事は校長先生の長い話があるということなのだろう。僕の以前いた高校では校長先生だけの話で軽く一時間は越えてしまったという恐ろしい話が語り継がれている。今では十分ぐらいで他の先生方が止めるというちょっとおかしな光景を見ることがなるのだが、はたして、この学校ではどうなのだろうか？

「天道時、あそこがお前の席だ」

このクラスは北側に廊下があつて北側に一番近い席が女子で次が男子、それ以降が男女が隣同士になるようになっていくという席順のようだ。僕の席となるのは一番南側の一番後ろ。ちょうど女子が一人で座っているような場所だった。

休み時間になり、時間に束縛されている高校生たちが自由の羽を広げて僕のところへとやってきた。

速効で話しかけてきたのは前の席に座っていた男子でどうやらこのクラスの席順は出席番号で決められていないようで自由に決められたのか五十音順では並んでいない。珍しいといえば珍しいのだが……………何か裏がありそうだ。

「やあ、どうも、僕の名前は霜崎剣治だ。呼び方は君が自由に決めてかまわないよ。なれなれしいかい？ いいや、なれなれしくなんて

ないのさ、剣治と呼んでくれるとフレンドリーでいいと思うね」

「あ、うんじゃあそう呼ばせてもらうよ」

眼鏡をかけていてインテリそうな男子（剣治）もいれば、それを脇からどかすようにして似たような顔をした女子が顔を覗かせてくる。なんとなく、先ほどの剣治という男子生徒に似ている様な気がしないでもない。くせつけが頭のつつぺんにあってニコニコしているような印象を受ける。

「私、霜崎亜美！これからよろしくね？呼び方は何でもいいよ、その剣治みたいに名前と呼んでくれたってかまわないから」

「え、うん……………よろしく」

その後も段々と人が増えてきてなんとまあ、このクラス三十九名の九割が僕に話しかけてきてくれたのだった。ここより都会の高校に通っていたのだが、そこでは色々とあってあわただしく過ごしていたのを思い出す。そのときは見事に村人Aみたいな感じで日々を生活していたような気がする。

この学校では式の前には毎回毎回掃除があるようで、大掃除となつた。大掃除では霜崎亜美、霜崎剣治たちの班に入って校庭の掃除をすることとなり、若干の不安と多量の楽しみがプラスされてまあ、プラスの要素のほう大きい。掃除もあっさりと終わってしまい、することも特にないので壁にもたれて話をする事となったのだが

……………

「へえ、天道時君って部活には入ってなかったんだ？」

「うん、入ってもなんだか活躍できる気がしなかったからね」

「ふむ、そんなことなら今日から生徒会に入ってみないかい？君のような従順そうでおとなしそうな雑用が……………こほん、お手伝い君が一人ばかり欲しいなって会議でも出ていた頃なんだ」

霜崎剣治はどうやら生徒会長のようだ。僕は肩をすくめてそれを遠慮させてもらった。きつと、この人物は嘘をいわないような素直な性格をしているに違いない。

「だけどもあ、何か部活には入っていたほうがいいのかもしんないよ

？」

霜崎さんはそんなことを言っている。表情が険しいのは気のせいだろうか？何故か勉強せずに受けることとなった中間、期末テストを思い出させる。そういえばろくな点数はとれなかったな……

「そうだね、確かにそれはいい提案かもしれない」

剣治もそんなことを言っている。その表情は軽い気持ちで不良をからかって停学沙汰にまで発生してしまったときのような顔をしている。

「へ？何で？」

当然のように僕はそれに対してきょとんとしてしまった。僕の疑問を解決しようと剣治が首をすくめて答えた。

「この高校、文武両道を目指しているらしくってね……部活に入っていない連中はそれなら勉強まっしぐらだ！って使っていない特別教室とかに押し込まれて午後六時半ぐらいまでずっと勉強しないといけないのさ。ま、今のところ帰宅部に所属している連中は一人もいないんだけどね」

霜崎さんも頷いて続ける。

「全員が適当な部活に入ってるの。今じゃ、公認されていない同好会……『世界探求同好会』とか『日がなごろごろ同好会』に『召喚同好会』って意味ふめくな同好会まで出来上がっちゃってそこに皆入っちゃってるんだよ。あとは適当な部活の幽霊部員」

「へえ、大変なんだね……」

霜崎さんが言い終えると再び剣治がどこからか生徒会入部！とか書かれた紙を取り出した。

「で、そこで生徒会！生徒会メンバーは今のところ五十七名いるんだけど……」

「そんなにいるの！？」

「ま、ここも相当ゆるゆるなところだからね。仕事をしていない人も多い……ま、まあ、私はそうじゃないんだけどね」

そう語るのは霜崎さんである。目を泳がせているところを見ると

彼女もそのお仕事をしてくれていない人のひとりに違いない。

「今じゃ第二生徒会を作ろう！とか分裂の危機にあるのさ。ま、考えておいてくれよ」

「ふん」

渡された紙をポケットになおして再び談笑をしていると先生に見つかって怒られてしまった。しかも、気がついてみれば怒られているのは僕と霜崎さんだけだった。先生はそのことに気がついていない……というより、もとよりそこに剣治がいたことを知らなかったような感じがする。

「あつたく、また剣治の奴どこ行きやがったんだあ！」

先生のお叱りが終わり、腕をグーにして空へと叫んでいる霜崎さんに僕はため息をついていた。

「剣治っていつもこうなの？」

「ん？そうだよ。うちの従兄はいつもこんな感じ……巻き込まれるときはいつもいないって所だね。責任転嫁は得意だし、口はめちゃくちゃ強いよ。あいつが怒られていることはみたことがないなあ……」

ここで気がついたのだがどうやら霜崎さんと剣治は従兄妹だったようだ。

「ま、とりあえず急いで体育館に向かおう！」

「そうだったね！」

僕と霜崎さんは二人で体育館へと向かい走り始めたのだった。

「あのさ、天道時君の家ってどこ？」

「んゝ家って言うよりも居候って感じなんだけだね……木曾さんってところの家。近くに公園とか田んぼとかがあったような……」

「！？」

そういうとめちゃくちゃ驚いた顔をする霜崎さん。どうかしたのだろうか？

「あ、あ……なるほど。ところでさ、天道時君は……」

「ほおら！君たち早く行かないと式、始まってしまうぞ」

先生の口調を真似したらしい剣治がいきなり姿を現した。まるで忍者か影の刺客だ。きつと江戸時代ごろに生きていたら伊賀の忍者か甲賀の忍者の頭目ぐらいにはなれたかもしれない。

「!？」

「剣治!？どつから湧いたの!？」

「心外だな……………ずつと君たちの後ろにいたじゃないか」

そういつてさも『心が傷つきました!悪いのはこの二人です!』といった表情をしてみせる剣治に霜崎さんが走りながら鉄拳を食らわせようとしたが、それをさらりとかわす剣治。むう、無駄な動きを霜崎さんはしていないところを見ると何か習っているのだろうか?それに、剣治もその一撃を軽く避けたところを見るとただものではないかもしれない。

「避けない!きちんとあたりなさい!そんで、鼻血を撒き散らしなさい!」

「H A H A H A、避ける?避けてないよ、君のパンチが的確な場所を捉えなかったからあたらなかっただけさ……………時雨君だったらパンチよりもパンチラで鼻血出しそうだけどね」

「ちょ、ちよつとどういう意味だよ!」

確実に相手を馬鹿にしているような表情をする剣治。彼は去っていったしまった。そして、その言葉でスイッチが入ったのか目つきを変えた霜崎さんがそれを追いかけて廊下を曲がって……………

ガターン!

「やばっ!!!」

そんな音が聞こえてきた。そして、霜崎さんのものであるう足音があつという間にしなくなった。ダダダダ……………という擬音が聞こえてきそうでなんとなくアニメ風だなとおもってしまった。

「?」

霜崎さんを追って廊下を曲がってみると頭から何故かバケツを被

つて震えている僕の担任の先生が立っていた。心なしか、ここにいとやばい気がする。

「……………」

戦う、仲間、魔法、逃げる……………逃げる！

「ちよつと待て！」

しかし、回り込まれてしまった。く……………体育教師という肩書きは伊達ではなかったようだ。すばらしいフットワークである。

「天道時、お前が犯人か！……………しかし、転校してきたばかりのお前とは考えられないな……………ああ、そういえばあの二人組みと早速釣るんで……………違うなら犯人を言え！」

そんな……………友達を売ることなんて僕には出来ない！

友達のことを思っている僕のことをどう思ったのか先生は続ける。

「さもないと、反省文を二十枚書かせるからな！もう一度言っぞ、お前が犯人か？」

「いいえ、霜崎亜美さんが犯人です」

友達？残念ながらこの高校に来てまだ出来てないんだ

こうして僕は体育館へと入り、その代わりとして連れ出される霜崎さんを見送ることなく校長先生の話聞いていたのだった。無論、彼女の目から発せられる非難の視線を僕が見るわけがなかった。

「まったくもう！酷いよ、天道時君！」

「いや、酷いのは剣治だと思っただけ……………」

放課後、家が近いとのことだったので僕とともに二人は帰ってくれることとなった。

このままいくと霜崎さんが見せた悪鬼のような顔が僕に向けられるかもしれないので慌てて話題をそらした。いや、既に向けられている気がしないでもない。

「あ、それよりさ……………霜崎さん何か言おうとしてなかった？」

「へ？何を？な、何のことだったけ？」

彼女が何かをはぐらかそうとしているようには見えないので本気

で忘れているだけなのだろう。

「ほら、木曾さんちつて言おうとしていたときだけ……」

「あ、あ……あれね」

どうしたものだろうかという表情を僕に見せたのだが、剣治がそれをさえぎった。

「それはまた今度教えてあげるよ、この僕がじきじきにね……亜美さあ、言葉にも力はあるんだよ、時雨君が該当しちゃったろうするんだい？これ以上警察の仕事を増やしちゃ駄目だよ？わかった？」

「…………その点はまあ、反省してます」

「ん？ちみいゝ本当かい？」

無駄に偉そうだ。

「偉いんだよ、僕は…………生徒会長、それはすべての生徒の上に君臨する帝王なのさ」

つくづく恐ろしい男と友達になってしまったかも知れないと思い後悔したのは既に遅い。後から悔やむから後悔なのだろう、感じのいいお勉強となった。

「ま、それはともかく…………とりあえず、ここで話すにはちょっと危ないからね」

「危ない？そんなにやばげな話なの？」

不思議に思つてそれも聞きなおそうとしたんだけど…………

「じゃ、ばいばい」

霜崎剣治家に到着したようで、剣治は一方的に別れを告げると家の中へと入って行ってしまった。

「…………行っちゃった」

「うん、行っちゃったね」

残されたのは僕と霜崎さん。霜崎さんなら少しぐらい知っているだろうと思つて聞こうとしたのだが…………

「あら、亜美じゃないの」

「あー母さん!？」

車が近くに止まって窓から顔を覗かせてくる一人のおばさんがいた。成る程、霜崎さんが成長したらこんな感じになるかもしれないといった雰囲気をおわせるものだった。

じろじろと僕のことを眺めた後におばさんは言った。

「あゝ……………悪いわね、デートのところを邪魔したみたいで」

「ち、違っわよ！彼は今日から同じクラスになった天道時時雨君よ！」

慌てて母親に告げる霜崎さんに僕はその母親に頭を下げる。

「どうも、天道時時雨です」

「あらら、単なる同級生だったか……………どう？うちの息子にならない？」

「は？」

いきなりの展開で読めなかったが慣れっこなのか霜崎さんは亜美母をせかす。

「もう、そんなことより……………ところで、お母さん今日何か用事でもあるの？」

よくよく見てみれば他にも数名、人がこの霜崎家にやってきているようであった。

「ああ、ちよつとね……………狐面関係……………おっと、口が滑っちゃった」

「狐面？」

首をかしげた僕を見て苦笑している亜美母。

「亜美もついでにちよつと来なさい」

「え？私も？……………じゃ、天道時君また明日ね？」

「え？うん」

剣治の家の中に入って僕は木曾家へと帰路についたのだった。その途中、僕は電柱の近くで一つのお面を拾った。

「ん？」

それは狐のお面だった。汚れていて額の部分に穴が二つ開いているものだ。しかし、どこことなく拾うと呪われるような代物だと感じ

た僕はそれを放り投げておいた。うゝん、どつちかというところちのほうに呪われそうかもしれないなあと後になって気がついた。

木曾家に帰り着くと、誰もいないようだ。まだ比較的はやめの時間帯なのでまだ誰も家に帰ってきていないだけのようだ………

「ふう……………」

僕の自室となった部屋に入り、少しばかり息をついた。

第二話 さあ、続けようかこのお話を（前書き）

第二話ですね。ええと、これより先、雨月始まって以来のスピード完結を目指したいと思います！

第二話 さあ、続けようかこのお話を

第二話

ここで、回想と今とがつながった。

「……………お茶でも飲もうかな」

お茶を飲むために自室を出ると、カサリという音がした。どうやら何かを踏んでしまったようだった。何か大事なものだっただらそれこそ一大事だ。僕は慌てて下を見やる。

「？」

拾ってみるとそれはこの家の間取図のものらしい……………面白そうだったので詳しく見ることにした。どこかに宝とかがあるとかはざっと見てかかれていないようだったので今度はじっくりと見ることにした。意外とこういう間取図とか好きなのでその昔あった土曜の朝のとある番組などは欠かさず見ていた。

「ん？」

僕に与えられた部屋の近くには『鬼面の間』というものがある。

さて、まだこの家の内部を歩いたことなんて殆ど無い。誰もいないうちに勝手に歩くのもどうかと思うのだが…………『鬼面の間』という部屋が気になったので行くことにした。この間取図には『用無き者立ち入るべからず』と書かれているのが気になるのだが…………

「……………鬼のたたりだぞお！」

「うをつ！？」

いきなり右肩をつかまれて慌てて振り返る。

「うわっ！？」

そこには赤鬼がいた！と思ったのだが…………それは単なるお面だった。

そう、鬼面をつけた木曾家の一人娘……………木曾焰華がいたのだった。

身長が僕より頭一つ分小さく、若干つり目で恐そうな印象を受ける

のだがその中身は人懐っこい。そんな彼女の年齢は僕より一歳年下で高校一年生。昨日、この家に来た時点で僕をものめずらしそうに触っていた。まだ会ってまもないというのに昔からの兄妹みたいな接し方をされるので困っている……いや、思えば五年前にもあったことあるなあ、初めてじゃないじゃん、僕？

「あはは、びつくりした？」

「そりやまあ……それにしても、その鬼面怖いね？」

「おっと、そういうことをこの鬼面の前でしゃべっちゃ駄目なんだよ？」

片目を瞑ってそう告げる。ニヤニヤしているところを見ると嘘を言っている可能性がある。

「え？何で？」

「顔が恐いっただけで中身を知らないような人物はこの紅鬼に呪われちゃうんだよ」

うらめしやうとか言いながら僕を脅かそうとしているのだがそれは幽霊ではないのだろうか？鬼と幽霊は違うだろう。

「ま、とりあえず時雨君が握っている地図のその部屋、行ってみる？」

間取図のことを地図と言っているところを見ると彼女は建築関係の仕事は出来なさそうだ。

「え？いいの？」

間取図を指差すと彼女はそれを僕からかつさらってみる。

「うつわあ……よく見てみるとなくなってたって思われてたオリジナルの地図じゃん。時雨君、これどうしたの？」

「ここで拾ったんだよ？てつきり焰華ちゃんが僕を脅かすために置いた物だっと思ったんだけど……」

「ま、いつか……さ、『鬼面の間』はこっちです！ちゃんとついてきてくださいね」

バスガイドさんみたいに間取図と鬼面を片手に持って歩き始める。僕もその後を追って『鬼面の間』へと向かったのだった。

『鬼面の間』があるのは僕の部屋から三部屋ほど隣の部屋だった。
「ここが『鬼面の間』でえゝす」

即席バスガイドさん（笑顔だけは一級品）はそういうと何も無い壁の前に僕を案内してくれたのだった。

「……………あの、部屋の扉なんてどこにもないけど？」

「んゝそうだよ。『鬼面の間』って確かに存在するんだけどさ…………

…入れないんだよ」

「入れない？」

そりゃまた不思議な部屋だな……………そこで殺人事件があれば無条件で密室殺人だ。

「五年ぐらい前まではきちんと入れたんだけどね……………鬼が暴れるとか言って死んだばーちゃんが壁にしちゃったんだ」

首をすくめて焰華ちゃんはそういうと『鬼面の間』の壁に刺さっている釘に鬼面をかけたのだった。もとはそこにあっただろう。「とりあえず、今じゃこんな風に鬼の面をかけているだけになってるんだ」

「へえ、けどその鬼面で遊んでいいの？」

「いいのいいの。どうせ、レプリカだろうからねゝ本物だって今どこにあるかわかんないし……………贋作多いよ、この世の中」

そういつてあっちで遊ぼうよと僕の腕を掴むと廊下を引っ張っていったのだった。

「……………」

なんとなく、鬼面の視線が僕を捉えたような気がしたような気がするが、気のせいかもしれない。それか、疲れているのだろう。今日は色々あったからなあ。

明日の準備も終わり、僕は自室でうとうとしていた。

カーテン！！

「うを!？」

何か物凄い音が聞こえてきた気がして慌てて目を覚ます。

「……………」

しかし、部屋の中に何か配置が変わっているようなものはないようだった。

「……………気のせい？」

だろうか……………そう思っそろそろ寝たほうがいいかもしれないとおもってトイレに行くことにした。トイレの途中には夕方焰華ちゃんに案内された『鬼面の間』がある。まあ、別に部屋の中に入るわけでもないで別にどうといったわけではないのだが……………廊下に出て静かに歩く。もう他の人は寝てしまっているようで静かだった。

「……………」

『鬼面の間』の廊下にあの鬼面が落ちていた。どうやら、この鬼面が落ちた音が先ほどの正体のようだ。

「……………しっかしまあ……………夜中見ると本当に怖いな……………」

僕がこれまで見たことのある鬼面はどれも頬が膨らみ口が裂けていて金色の目が膨らんでいて角が生えているものなのだが……………今僕が手に持っている鬼面は目が落ち窪み、下の歯茎から二本の牙が伸びていて角が短かった。さっさと鬼面を釘にかけようとしたのだが……………

「……………お？」

ふすまが開く音がした。しかも方向的にいつて焰華ちゃんだろう。そこで夕方のお返しを考えてみた。作戦は単純である。この鬼面をつけて驚かす。シンプルイズベストプライスってやつだろう。くく……………仕返しにはもってこいの道具がこの場所にはそろっているのだああ!!

「ににに……………」

鬼面を顔につけると……………

「お？」

ちょうど『鬼面の間』の壁が視界に入ってきていたのだが……そこに壁などなかった。『鬼面の間』の内部が見えるのだ！そこにはなんと、“何か”がいた。あちらはまだこちらのことに気がついていないようなのだが……気が付かれれば何か僕は大事に巻き込まれる……そういった漠然とした言葉が頭に響き渡った。

『鬼面の間』にいる謎の影に気が付かれないように静かに静かに……まるで泥棒さんのように僕は廊下を歩いていたのだが……

ギシ……

「あ……」

年季の入った日本家屋だ……音がするのは当然だろう。しかも、間抜けであんぽんたんみたいな声を出してしまった……僕は鬼面が顔についたままだということを忘れたまま、後ろを振り返ってしまい……

『鬼面の間』にいる誰かと目を合わせてしまった。

「時雨君！時雨君！！」

「ん？あ……」

誰かにゆすられているような感じがして目を開けてみると、心配そうな焰華ちゃんの顔が目の前にあった。何かぬるぬるとしたものが口元まで来ていてそれを拭って暗いながらも目をそれに向けてみると……鼻血が出ていることに気がついた。

「ん？あれ？何で鼻血が……？？」

立ち上がり、触つてみると鼻血だけではなく……からだのいたるところから血が流れていることに気がついた。不思議と、痛みはないのが不幸中の幸いだった。

「血が！血が流れてる！」

「ん？ああ……………そうだね……………」

段々と意識が遠のいていつている気がするのは血が抜けていつているからなのだろう。僕の周りの景色が歪み始めた。いや、逆に痛みが無いのもおかしいな……………

「時雨君！時雨君！！！」

焰華ちゃんの声が徐々に遠のいていき……………代わりに聞こえてきたのは恐ろしい声だった。

『……………我は鬼と呼ばれし人なり……………我を最後に殺し、狐面の女……………あれは鬼に憑かれし鬼病の鬼女なり……………この血、そのときに我が流した血のすべて……………このときより、我ら一心同体となり、狐面の鬼女、討たんとす！』

そして、目の前にはあの鬼面が向き合っていた。

「！？」

『……………さあ、我と誓え！』

「え？」

徐々に、その鬼面は近づいてくる。

『さあ、ともに！主の体はもう長くは持たない！鬼女を打ち倒してこそ主の体は解き放たれるのだ……………』

「え……………わ、わかったよ！！！」

『……………』

鬼面は姿を消し、僕の目の前に光が戻ってきた。

「……………ふう、もう大丈夫じゃな」

いつの間にかなにやら暗そうな部屋（窓がなく、扉が一つだけある場所）に自分が寝かされているのに気がついた。ろうそくがそろそろ命をつきかけているような短さになっていた。そして、僕の四肢には鎖がつけられていて拘束されているのだった。

「おぬしは鬼に食われるところじゃった」

「鬼に？」

そして、僕を中央にして四人のおばあさんたちが僕を覗き込んで

おり、焰華ちゃんのおじいちゃんが微笑んでいた……が、その表情が急に険しくなった。

「……鬼に魅入られたか」

「え？」

「時雨じゃよ、時雨……鬼と何らかの契約をしたんじゃろう？」

僕は夢の中の出来事かもしれないが、すべてのことをそこにいた全員に話した。鬼面が現れたこと、僕に狐面の鬼女のことなど……所詮は夢のことなのだけれども、焰華ちゃんのおじいちゃんとおばあさんたちは真剣に聞き入っていた。

しゃべり終わると、僕の鎖を取っていった。

「……その影の中に、鬼はおるのだな？」

「え？」

いきなりそんなことを言われてもさっぱりわからないのだが、確かに僕の陰の中から何かの息遣いが聞こえてくる。

「……『鬼渡し』が始まるのじゃな」

「え？『鬼渡し』って？」

焰華ちゃんのおじいさんは答えようとせずにこの部屋を出て行ってしまった。それにならうように殆どのおばあさんとおじいさんの後に続く。

「簡単に言っただけ鬼ごっこじゃよ……鬼はおぬし」

「鬼ごっこ？」

一人だけ残ったおばあさんが答えくれたのだがそれでもよくわからなかった。

「鬼ごっこって……一人が鬼になって、他の人が逃げるっていう……あの遊びですか？」

静かに頷くその顔がろうそくの光に当てられて不気味だった。ナチュラルにお化け屋敷で涼みたいという人にはうってつけであろう、この状況。

「この土地の鬼ごっこはちょっと違う……鬼に魅入られたのなら、調べるがよい。お主が生き残るにはそれしかあるまい……」

この町は皆がお前を混乱させるだろうが真実はここでは一つじゃ」
疑問を抱いた僕をそのままにして残っていたおばあさんもどこかに去っていった。残された僕は、陰の中の物言わぬ共同人の気配だけを感じていたのだった。

同時刻

「……………とうとう『鬼渡し』始まったようだね……………」

誰に言うでもなく、霜崎剣治は話し合いが行われている部屋を抜け出してそう呟いた。外にかすかに見える電柱の上に狐のお面をつけた巫女のような姿を彼は見たような気がした。

「……………鬼は誰かな？ふふっ、楽しみだ」

誰に言うでもなく、彼は呟いて口をほころばせた。

第三話 さて、これからどうなるのだろうね（前書き）

第三部分です。さて、本当にこれから時雨君の運命はどのようなのでしょうか……評価、感想ともに期待しますのよりしく
お願いします。

第三話 さて、これからどうなるのだろうか

第三話

その昔……争乱の日々が続いてきた時期があった。

ある村では代々鬼を退治してきた家系の一人の娘が鬼に体をのつとられ、狐の面をつけて村を荒らした……しかしある日、そこにうつろな目をした侍が通りかかり、その鬼を殺したのだった。

村人たちは男に感謝し、男はそのままその村に住み着いたのだが鬼はまだ完璧に死んでなかった。夜中、男に襲いかかった鬼は男の右腕を喰らったのだが何とか男は今度こそ完璧に鬼をしとめ、二度と復活しないように自身の体に封じ込めて自ら命を絶った。鬼にのつとられていた娘は幸いにも助かり、柄が立てられた男の隣で次の日自殺しているのを発見された。

これが、この村に伝えられている一般的な昔話である。今ではもう、忘れられているといって間違いないだろうが……

目が覚めるといまいちな感覚だった……まあ、無理もないだろうな、昨日は学校を休んでずっと寝ていたのだから。

『さあ、我とともに鬼女を斬るのだ』

「う、うん……」

起きているとずっと、そう、ずっと……朝食、トイレ、昼食、トイレ、夕食、お風呂、トイレ……ずっと陰は僕に話しかけていた。他人の影よりも僕の影はいつの間にか濃くなっており、存在感があつた。

「あゝ、そのさあ……」

『何だ？』

「どうやって斬るの？」

『……』

そついうと陰は黙り、この間だけ僕は束の間の休息を与えられた

ような気がした。なんにせよ、今のうちに学校に行く準備をするべきだろうと僕は考えて制服に着替え、焰華ちゃんと一緒に朝食を食べるのだった。

「……………あ、おはよう時雨君……………大丈夫？」

「うん、大丈夫……………よくあることだから。それより、おはよう焰華ちゃん」

僕が倒れたときに彼女が僕を見つけたのはそうなのだが、鬼の話などとは何一つとして話されていなかった。

知っているのは焰華ちゃんのおじいさんとそのとき周りにいたあの四人のおばあさんたちだけだろう。おじいさんは僕に絶対に焰華には言ってはいけないといっていたし、色々と忠告もされて体中から血が噴出してしまったあれは僕の持病ということになってしまった……………大出血病という名目となっている。

「前もあんなことがあったの？」

全身血液ポンプ男だと僕のことを思っているのだろう、焰華ちゃんはそのなことを言い出してきた。僕は危うく味噌汁を噴出すところだったが飲み込んで答える。

「うん、そうだよ。五年に一回ぐらいあったって聞いているけど……………まあ、僕が勝手にそう呼んでるだけでたまたまだったって思うかもしれないけどね」

「ふゝん……………」

おじいさんは他にも言っていた……………

焰華ちゃんのおじいさん、漸増さんの部屋へとやってきた僕。

「……………あれ？入れない……………」

扉を開けて中に入ろうとすると体が止まり、背筋が寒くなる。すぐにここから逃げ出したくなったのだが、そのときに漸増さんが部屋の中から出てきた。

「これはもう、『鬼渡し』を終えないとやばいじゃろって……………」

漸増さんは黙ってお札を取ると、僕は部屋に入ることが出来た。座るように促されて正座すると漸増さんはため息をついていた。「……………まさか、うちの焰華が時雨君に鬼面を見せるとはまったく思わなかった……………」

「え？どういう意味ですか？見たらいけなかったんですか？」

あれ以降、どこを探しても鬼面が見つからないような気がするのにはなぜだろう？最後に触ったのは間違いなく僕だからあの倒れた場所にあるのだろうと思ったのだがそこにもなかった。再び焰華ちゃんを持ち出した可能性が無いでもないが……………」

「ああ、そうじゃな……………正確に言うならば鬼面をつけてあの『鬼面の間』をのぞいてはいけなかったのじゃ……………あそこを鬼面をつけたままで見ると鬼が見え、魅入られてしまうのじゃ……………焰華の父もそれで死んだ。狐面の鬼女に殺されたんじゃよ。勿論、焰華にはそんなことをいつてはいないし、表向きじゃいまだ行方不明扱いじゃ……………これまで鬼面をつけてあの部屋を覗き込んだものが生きていることは一度もない……………部屋を覗き込む権利があるのは鬼面を所有している我々の一族の男だけじゃからな……………」

「……………」

黙りこむ僕に漸増さんは言った。行方不明になるとは聞いているが、死人扱いになるようだ、その鬼面をつけて部屋を見たものは。

「今、鬼面をつけているのは君じゃ」

「鬼面をつけているって……………」

自分の顔を触ってみた……………が、どこにも着いていない。

「……………硝子を見てみるといいじゃろう」

「？」

あつちの光景が見えるが、一応、反射して僕の顔も……………」

「！？」

僕の顔は見えず、鬼面がついていた。あの鬼面である。キモイ……………とかいっていたら余計何かに取り付かれたりするかもしれないから黙っておくこととしよう。

「わかつたじやろう？そして、耳を澄ましてみると良い…………陰がおぬしにささやきかけてくる」

「……………」

急にしーんとなったかと思うと頭に響き渡るような声が聞こえてきた。

『鬼女を斬れ…………狐面の鬼女を…………』

「…………どうじゃ？聞こえるだろう？」

「…………ええ」

陰を見ると、色が濃くなっていて頭上に角が生えていた…………。絶句する僕の顔をのぞくことなく漸増さんは続ける。緊張して尿意を感じたのだがそこはぐつと丹田に力をこめてふんばる。

「…………この村には一つ昔話がある」

「昔…………話？」

「そうじゃ、一つ昔話をしてやろう……………」

漸増さんはしゃべりだした…………

「まだこの村に鬼がおった頃の話じゃ…………その鬼を退治していた家系のある娘が鬼に取り付かれてしまったのう、今度は人の姿をして暴れまわった。それから村人は外を出歩かんようになってな、神出鬼没の鬼に代々鬼を退治してきた家系も困っておったそうなんじゃ。じゃが、そんなある日…………にこった目をした一人の男がこの村を訪れた。この家に伝わっておる話では人を殺しすぎて人としての心を失ってしまったような男だったらしいのじゃ。そして、鬼はその男に襲い掛かったのだが見事に返り討ちにあつて動かなくなってしまった…………それを陰から見えていた村人は喜び、とりあえずその晩だけでも男を泊めることにしたのじゃ。じゃが、鬼は完全に死んだわけではなかった…………男が寝たのを確認すると鬼は襲い掛かり、男の右腕を引きちぎった。男は右腕を引きちぎられたにもかかわらず、痛みという感覚がないのか今度は鬼を完璧に討ち果たした…………そして、何を思ったのか女がつけていた狐の面を被ったのじゃ。そして、自分の腹に刀を深々と刺してやってきた村人全員に言った

そうじゃ…………『我はこの娘の家系のもの…………鬼は我の体に封じ込めた！我が死んだ後は私の四肢に鎖を繋ぎ、祠にしてこの村の長老が見張るがよい！決して、決して後に出てくる鬼面で祠に納められた我を見るでないぞ！この娘にも重々言っておけ！』といったのじゃよ。長老は男が言ったとおりのことを運ぶことにした。長老は祠を作り、その祠を囲むようにして自宅を作り直したのじゃ…………そして、今この家がそうなのじゃよ。それから、様々なものが鬼面を被り、祠を見た…………全員が行方不明らしいが、その妻となったものの夢に行方不明になる前日に必ず出てきていたそうじゃな。様々なものといったが…………女が鬼面をつけて部屋を見ても何もなかった。理由はわからんがどうやらあの男と関係しておるのじゃろう……………」

「……………」

黙るしかなかった。

「…………わしはもう追ひ先短い…………時雨君がこの家に来るとき、反対していたと話はいいたじゃろう？」

「ええ、まあ……………」

母さんは確かに何人かが反対していたと聞いたのだが結局押し切ったと誇らしげに語っていたがまさかこんなことが起こると思わなかった。

「…………このままでは時雨君が死んでしまうのは目に見えてわかっているが…………わしの先祖たちも馬鹿ではなかった…………書物などにして残してくれているのじゃよ」

「本当ですか！」

つまり、もしかしたら助かる方法があるかもしれないということである。

「…………これじゃ、もっていくが良い」

「ありがとうございます……！」

その書物に載っていたことは色々であった。

それはなんとなく“ルール”といった感じのようなものだった。

一、鬼が鬼女を切る権利は一度だけである。二、『鬼渡し』が始まる時間帯は午前零時から三時間である。三、鬼の身に危険が起こるときは段階が踏まれる……。一段階目、自分の陰の中の鬼の色が紅くなり、二段階目は他人に角が生えているように見え始める、最後の段階、狐面の鬼女が近づいてくるのがわかる……。というものだ。

「ねえ、時雨君、大丈夫？」

「え？う、うん……………」

「何か無理してない？」

「してないよ……………大丈夫」

簡単な話、昼は狐面の鬼女が襲ってこない。というのも、行方不明となった人たちは全員が全員、朝いなくなっているのだ。ルールには鬼が……………つまり、僕が鬼女を斬るのは一度だけしか権利がないとかかかっていた。これは僕が誰かに刃物を向け、斬りつけるまで狐面の鬼女は僕に襲い掛からない……………ということらしい。

今のところ大まかにわかったことといえばこのくらいなのだが、希望は持つべきだろう。おじいさんも寝る前に言ってくれた。

「……………これまで、行方不明になったものたちはすべて伴侶がいたんじゃない……………まだ学生のみのおぬしならば助かるかもしれないじゃろう？時雨君、君には彼女はいるかね？」

「いえ、いません……………」

「……………もしかしたら助かるかもしれないなあ」

きつと、僕を落ち着けるためにあんなことを言ってくれたのだろう。もてなくて良かった、とはさすがに思えない自分が悲しい。

「さ、そろそろ行こうか？」

「うん、そだね」

焰華ちゃんも元気そうな僕を見て安心したのかそいつって鞆を持った。僕も同じようにして鞆を持つ。

「……………あ、そういえばね……………」

「ん？」

急に立ち止まった焰華ちゃんに危うくぶつかりそうになりながら止まるところを向かずに焰華ちゃんは言ったのだった。

「……………昨日の夜さ、時雨君が私の夢に出てきたんだ」

「!？」

危うく鞆を落としそうになったのだがすんでのところ落とさずにすんだ。

「そしてね、さようならって……………いったんだ」

「!？」

今度は駄目だった。鞆は見事に地面に落ちた……………あれ？それより……………既に焰華ちゃんの夢に登場してルールに載ってた最悪な……………そう、行方不明になる最終段階踏んでるんじゃない？けど、実際はここにいるし……………死んでないし……………

「大丈夫？鞆、落ちたよ？」

「え？う、うん……………大丈夫」

鞆を拾ってくれた焰華ちゃんにそういうも、心の中は恐怖でいっぱいだった。しかし、何故……………という気持ちがないわけでもない。

「あのさ、焰華ちゃん……………」

「？」

僕は不思議そうな顔をしている焰華ちゃんにお父さんのことを聞こうとしていたのだが……………やめた。自分が助かるために他人を陥れるほどまだ僕の状況は切羽詰まっているわけではないし、あんまりあったことがない僕をまるで兄のように慕ってくれている彼女の心の傷を再び開けるようなまねはしたくなかった。

「……………早く行こうか？遅れちゃいそうだし……………」

「うん？勿論だよ」

一瞬、不思議そうな顔をしたのだが彼女は頷いて玄関を開けた：

……………

「!？」

そこにいたのは額に二つ穴の開いた狐面を被った女子生徒が立っていた。

「おはよ、天道時君、焰華ちゃん」

狐面をとって出てきたのは霜崎さんだった。

「あ、ああ……おはよう、霜崎さん」

「おはよう、亜美先輩」

僕らが挨拶をすると霜崎さんの後ろから剣治が現れた。

「おはよう、お二人さん」

「うん、おはよう剣治」

「剣治先輩、相変わらずですね……」

何故か呆れたように呟いて焰華ちゃんは歩き出し、それをスター
ト合図として僕らも歩き出した……まだ、空は青空に輝いている。

「……………鬼女は亜美さ」

「!？」

剣治の声がいきなり聞こえてきたような気がした。だが、剣治は
焰華ちゃんと話している。

「どうしたの、天道時君？」

「え? いや……………」

僕はさっきの言葉について考えるのをやめた。不毛だろう、今頃
考えたってさ。

第五話 おや、日々はうつろいかわりゆくものなんだよ

第五話

あれから一ヶ月、さらに何事もなく………というわけにもいかず、残念なことに日々シユールな光景が僕を襲っていた。

家に帰れば部屋の中に意味不明な生命体がまるで迷子みたいにあたりをきよきよしていたり、電柱の陰からなんか出てきて連れ去られそうになったり、持っていた赤色のあるプラモの自慢の角が消えていたり……それはもう、戦々恐々といった日々を送っていたのである。日に日に目は落ち窪んでいき、それはもうまるで死人のような顔となってしまうていた………ということもなく若干顔色が悪くなるぐらいだった。あれ？とても繊細な性格だっておもっていたんだけど意外と僕って図太いかもしれない。

そして、今は夕食が終わった後のまったりとした時間。僕と焰華ちゃん以外は家族の人たち全部が公民館に集まっていたりする。

「ねえ、時雨君顔色が悪いようだけど？」

「んゝ最近まともに寝れないからね……眠りが浅いつて言うかさ……」

焰華ちゃんが心配そうにそんなことを言ってきているが漸増さんとの約束で彼女には『鬼渡し』についてのことを一切喋っていないのだ。

焰華ちゃんが入れてくれた紅茶をすすりながらあんまり働かない頭で必死になつて言い訳を考える。

「ちよつと考え事があつてそれでちよつと疲れてるつて言うか……」

「……」

「そうなの？」

「うん、そうなの」

「それなら………いいものがあるよ」

にこりと笑った焰華ちゃん的笑顔に嘘をついた僕……いやいや、

嘘はついてないよ、うん。今、僕は切に命が削られていつています………といいかけたがそんなこといつちゃったら元も子もないので黙っている。焰華ちゃん、はポケットをさがさそと音を立てて何かを取り出した。

「てってれてゝってて………睡眠薬うゝ」

「何故そんなものを!？」

「な・い・しよ、これ飲めばぐっすり眠れるよ」

「………いや、遠慮しとくよ」

紅茶をさつさと飲み干すと、彼女がにやりと笑う。その笑顔に何か薄ら寒いものを感じ、僕は急いで寝たほうがよさそうだとおもいあたった。

「勿論、時雨君が拒否するってわかってたから既にその紅茶の中に入れておきました。時雨君、私が殺人者だったらとくに死んでるよ」

既に手遅れ判明………強行するところは僕んちの家系なのね………

…。

「な、何だって!？」

思えば段々と眠くなってきたような………慌てて立ち上がるが足元はふらふらでどうやら焰華ちゃんによっかかっているような状態だった。

「ほら、あとは私に任せて………おやすみ………」

「そ、ん………な………」

ぱたり………という僕が倒れた音が聞こえてきて、目の前に映るのは焰華ちゃん、の二本のあんよだった………す、すべすべしてそう………がくり………。

剣豪が一人、僕の目の前を歩いていく。顔には鬼面をつけており、腰には禍々しい何かを発する日本刀がつけられていた。

「?」

首をかしげていると今度は狐のお面を被った一人の少女が歩いて

いく……しかも、どこかで見たことがあるような場所だった。こちらは手に能で使われるような

「！」

声を出すことが出来ないことに気がついて僕は驚いたのだが、目の前を通っていった二人組みは僕に気がついていないようだった。

彼らがやってきた場所……それは学校の屋上だった。二人して向かい合い、手にする獲物で相手の隙を狙い続ける……。

「？」

しかし、そうおもっていたのは僕と狐面をつけた人のみだった。鬼面をつけた侍は日本刀から手を離してただ、立ち尽くしただけだった。ほかに何かするというわけでもなく、空を眺めるようなそんな感じだった。

狐面の人も動かない。きっと、相手が何かしようとしているとおもっているのだろう……もしかして……手品とか？刀を抜いたらお花がポン……いや、お鼻がポンのほうが観客が踊るかもしれないな……。

僕が馬鹿な予想をしているととうとうその侍は刀も抜かずに再び僕の目の前を通っていき……手品などをすることもなく僕の目の前を通過。

「……今度で最後だ、君が最後をつとめて欲しい……」

「！？」

そのように僕に言い残して去っていったのだった。狐面をつけた人はただ、その消えてしまった鬼面侍をぼーっと見ていただけだった。そして、僕もその後姿が扉で見えなくなるまでずっと見続けていたのだった。

「……………」

「結局のところ、これまで鬼面をつけた人たちは実のところ真相までたどり着いたんだよ、時雨君」

今、自分の部屋で眠っているということに僕はようやく気がつい

た。

「……………剣治？」

「やあ、君が寝ているって聞いてお見舞いにやってきたのさ。亜美も一緒にいるよ」

「ども」

僕の所持している漫画本をじーっと見ながらあへ…………と珍しい笑い方をしている。霜崎さんがニヤニヤしているところを見ると非常に普段とのギャップがすごすぎてなんだか恐いな。

「これから先の話は僕と亜美だけの二人の話さ……………焰華ちゃんに一服盛られた哀れというか、おばかな天道時時雨君はまだまだ夢の中……………そうだろ、亜美？」

「もっちゃん……………けどまさかあの子が天道時君に対して薬を盛るなんて考えられないって……………わけでもないかあ。それほど顔色が悪かったんだらうね……………それに、もとはといえば、焰華ちゃんが悪かったりするんだけど……………」

霜崎さんは首をすくめながらも視線は漫画のほうだったたりする。あれ？この二人はお見舞いに来てくれたんじゃないのだろうか？

「ま、あの状況じゃまやかしても見ていずれ狐面の鬼女に殺されていただらうね」

「……………」

「そうだね、狐面の鬼女って呼ばれている存在は見えない鬼を一生懸命追ってるからね」

にやりと笑う霜崎さんの微笑というか……………そんな笑みがこれほど恐く感じたことはなかった。

剣治は別になんとも無いように独り言のように口を開き、静かな部屋にこだまするような声音でしゃべる。

「……………ま、これまで鬼面が引つ付いた人の中には確かに間違つて人を切っちゃった人もいるけど結局は最後のほうまで……………亜美がしゃべっちゃったところまでやったんだけどねえ」

剣治がちらりと霜崎さんのほうを見てしゃべる。見られたほうの

霜崎さんは苦々しそうな笑顔を作って冷や汗だらだらにしながらしゃべった。

「だ、大丈夫だって！まだ山の神様も起きてないし、これからどうにかすればいいんだからさ！今年こそ最後にしないと！」

決意を新たにしたという表情を剣治に向け、僕に親指を立ててくる。大丈夫だ、心配はないといわんばかりだが若干不安でしようがない。大体、何をしようというのだろうか、この二人は……

「さ、そろそろ僕らは帰るとしよう」

結局、何をしに来たのかさっぱりわからなかったな。

「そうだね、天道時君は眠っているようだし……」

いや、はつきりとした意識はあるのだが未だに僕に対してはしゃべらせてくれないようだ。

剣治は立ち上がり、それにえられるかのようにして霜崎さんも立ち上がった。

「最後に……伝言。身の回りに何か変わったことが起こったらこの家の南側にある丘に来て欲しいんだ。勿論、時間なんて関係ないよ、何か変わったことが起こったらすぐに言ってほしい……おっと、眠っているからいつでも無駄かな？」

無駄以前に既に身の回りには変わったことが起こっている。従妹は薬を盛るわ、なにやら意味深な夢を見るわ、意味不明な二人組みが僕の部屋にやってくるわ……充分変わった出来事に違いないだろう。これ以外に何か起こるのだろうか？今すぐその丘に行ったほうがいいかもしれない。もっとも、行ったところでいいことはあまりなさそうだが……。

「じゃ、失礼しました」

「ばいばい、時雨君」

二人とも扉から出ずに窓を開けて……あれ？それ以前に僕の部屋に窓は無い。

「……………何者なんだ、あの二人？」

気がつけば窓など僕の部屋には無く、普通にそこにあったのは壁

だった。しかしまあ、いまさら鬼に取り付かれている僕から見てもこれは非常におかしな出来事だった。

しかし、剣治がいつていたであろう『何か変わったこと』というものはその夜、早速起きたのだった。

「ん？」

あれからそのまま眠りに入り、気がつけば深夜十二時を過ぎていた。この家の人たちは基本的に十一時には眠っており、静かだったのである。聞こえてくるのは無、しいて言うなら闇の風の音だろうか？

目の前に広がる闇に目を凝らしてみると……僕の机の下に何かがある。それは僕に気がついていないのか体操座りをして虚空を見つめており、僕の布団の隣には……

「……ひっ！？」

角を生やした俗に言う鬼という存在が金棒を脇に置いてこれまた虚空を見つめていたりもする。僕の部屋へと通じるふすまが開き、これまた別の鬼が姿を現して足を引きずるようにして歩いてくると他の鬼が座っていないところに座り、虚空を見やる。

「！？」

気がつけばいたところに鬼はおり、動かない。だが、逃げようと考えようにもこんなに鬼がいてどこに逃げる事が出来るのだろうか……僕がほとほと困っていると声が聞こえてくる。

『……陰の中に我が愛用していた“土蜘蛛”が眠っておる』

この暗闇よりも昏い部分……それが僕の陰だった。そこに手を触れてみるとなんと、陰を通り越して僕の腕が消え……陰の中で何かを掴んだ。

「……これは……」

『……これは“土蜘蛛”。その昔我とともに日々を過ごしてきた
我のすべて』

僕が握っていたのはぼろぼろの鞘に入れられた日本刀。何かとても禍々しいオーラのようなものが見えているような気がしないでもないが、今はそんなことをいつている場合ではないだろう。

「うっ……」

しかも気がつけば鬼たちは皆僕のことを見ていた。露骨に涎なんかをたらしている奴は確実に僕を食うつもりだろう。

「く、喰われてたまるかよ！」

僕は刀を抜くとそのギラリと光る冷たい刃を無我夢中で振り回し、相手の一瞬の隙をついてこの期に及んでふすまを蹴り飛ばすことなく、普通に開けて廊下に出て一目散に玄関へと向かっていったのであった。

廊下の途中、人の気配が感じられたので刀をなおし、隠れるが、誰もやってこない。気配だけは一応目の前を通り過ぎていき……僕は背筋がぞくぞくとなるものを感じた。

「やっぱ、急いで行ったほうがいいよね？」

誰に言うでもなく、僕は霜崎剣治&亜美がいていた場所に今すぐにも行きたいと切に願わざる終えなかったのだった。

第七話 あれ？日が昇ってきたようだね

第七話

僕の声が響き渡る……………そして、その後に霜崎さんの声が返ってくる。窓の外に昇っている月はいつの間にか消えていたのだが朝日が昇ってこようとしているのかうつすらと光が地平線のかなたに確認することが出来た。

「……………え？漸増さんも鬼面をつけたって？」

僕の声が響き渡り、まだ僕ら以外誰もいない校舎に一瞬の喧騒を生み出す。

「うん、霜崎家じゃ有名な話……………唯一戻ってこれた人だって聞いているよ？漸増さん自身も物凄い剣の実力者だし、鬼面をつけることによつて人とは違った動きも体得できるって聞いているからね。だから自分の力で鬼面をどうにかしたんだろうって噂……………けどさ、木曾家じゃ知られてないみたいなんだ。私たちの方だってそのことについては詳しく知らないし、知っていることはさっきも言った通りで漸増さんが鬼面をつけてこの学校に入り、戻ってきたって言うだけ……………」

だけど、僕の記憶では漸増さんは鬼面をつけたことが無いって言うていたっけな？うーん、結構なお年みたいだったし、そろそろ物忘れしはじめたんじゃなかるうか？そのことを伝えたのだが霜崎さんは首を横に振った。

「ぜーんぜん、あのおじいさんは殺しても死なないって有名な上に何でもかんでもこなせるよ？姿勢も正しいし、記憶力だって私より上なんじゃない？」

まったくもつてこの鬼面よりもミステリアスな人がまさか同じ屋根の下に住んでいるとは思ってもしなかった……………それなら何故、僕を助けてはくれないのだろうか？うーん、もしかしたら嫌われているのかもしれないなあ……………

「……………一体、どういうことなんだろう？あれ？」

霜崎さんは狐面を再びつけていた。

そして、気がつけばそこはずっと同じ廊下が続く一つの道……………奥を見渡そうにもずっと同じ光景が続いているだけで廊下、トイレ、他の教室など……………そんなものはどこにもなく、外に見えるのは永遠と続く校庭のちょうど半分の向こう側からこちらに来ようとしているのだが一向に来ることができないジレンマしている鬼たちだった。

『さてと……………もうちょっとその話について色々と聞いておきたかったんだけど……………私たちの出番がやってきたみたい』

「え？」

呟いた僕の耳に聞こえてくるのは風の音……………いや、悲鳴の音だった。とてももの悲しく、心が悲しみで満ちていくのが手に取るようにわかるという不思議な音だった。

「だ、誰か……………この奥にいるの？」

『いや……………違うよ、これは声なんかじゃない……………校内から吹き出る風だよ、風。この高校には七不思議がいくつかあってね、これも昨日剣治から教えてもらったんだけど……………』

話を聞こうとして霜崎さんに若干近づいたのだが……………

「ん？……………って！うおう！？」

何かがすごいスピードで転がってきたとおもって飛び上がる。そして、止まったそれを見るとそれはなんと！

「ず、頭蓋骨！？」

『そう、頭蓋骨が……………転がってくるんだって、剣治がいなかったら私たちも今頃こうなっていたかもね……………ああ、それが鬼面保持者だった人たちがどうかはわからないよ。私、確かに怖い話は好きだけど噂になっっている場所とかにいたりしてそれを実際にやってみようとおもうほど勇氣はないからね』

「ぼ、僕もそうだよ」

『警察に教えようにも信用してくれないし……………下手にその頭蓋骨

を外に持ち出したりしたら私らがどうにかなっちゃうよ』

それはまったくもって洒落にならない……のだが、すでにどうにかなっているであろうこの状況はカウントされないのだろうか？ま、まあ……僕はまだまだ若いのだ、こんなところでくたばるわけにはいかない……そのためにもするべきことはただ一つ……

「僕はどうすればいい？」

『そうだね……ともにこの奥に行って神様を起こすことだけじゃない？』

震える両足を叱咤して僕と霜崎さんはともに床を蹴って疾駆し始めたのだった。

一キ口は走っただろうか……だが、見えてくる景色は先ほどまったく一緒のもの。

「うーん、気が狂いそうだね」

『ま、そんな仕掛けもあるって剣治は言ってたっけなあ？この校舎を一回剣治と一緒に下見に来たとき私、結構いい名前をおもいついたんだ』

のんきにもそんなことをいいながらこちらに狐面を見せる霜崎さん。まったく緊張感が無いにも程がある。

「どんな名前？」

しかし、走ることしか今の僕らには選択肢が無いのでそれを聞いて見ることにした……今、隣の壁に貼り付けられている虫歯予防と痴漢予防のポスターを見るのは何百回目だろうか？

『その名も無限回廊』

「

第八話 あれ？時間ってこんなにもろいもの？

第八話

携帯電話から声が返ってきた。

『やあ、時雨君じゃないか……どうしたんだい？おじいさんがいなくなつてまさか行方不明にでもなつたんじゃないかっておもつたのかい？』

剣治はそんな適当なことを言っているようだったが、それでもまだ本心は見せてくれないようだ。それはまるで明日の天気について知らせているお天気お姉さんみたいな感じだった。とても軽いノリなのだ。

「いや……違うよ」

僕は慌てていたのでそんな冗談にかまっていられなかった。僕が言おうとしていたことなど剣治は知っていたようで、次の瞬間には軽いノリなどどこかに吹き飛んでしまったようなシリアス全開の声が返ってくる。

『大丈夫さ……君ら二人の事をあの人が……いや、漸増さんが無視するはずがないよ、あの漸増さんは……きっと二人のことを待っているって僕はかけたつていい……そうだね、はずれたら僕の大切なフィギュアをプレゼントしよう』

僕は剣治の言つた最後の言葉は無視して前のことについてたずねてみる。

「まってるって……どういうこと？」

学校へと急いで向かっている僕の隣に電柱の上から霜崎さんが現れる。まだ狐面はつけていないようだったが姿は既にあの巫女服のようなものだった。

「天道時君、あの無限回廊に……何か気配がしてる」

「え？それって一体………どういうことなんだろう？」

『おやおや、既に亜美までそっちに言っていたとは………お二人さ

ん、どうやら今日はデートのご予約が入っていたようで……先生には仲良く風邪をひきましたって伝えておくよ。ああ、その中に漸増さんが入るだろうからデートじゃないかな？」

最後に後のことは任せて欲しいと剣治は言ったのだった。

「うん！よろしく！！」

剣治に学校のことは任せ僕らは並走し、段々と大きくなってきている学校へと視線を移した。周りの人たちは数人いるのだが、まるで僕らのことには気がついていないようだった。

校内へと入る扉を開け、僕らは転がるようにして中に入る。霜崎さんが指をぱちんと鳴らすとそこはもう、永遠と続く廊下……無限回廊へと変わっていた。

「……ここから先にはいかんせんぞ」

「漸増さん！？」

「やつぱりか……」

ただ、昨日と違うのは廊下の真ん中に漸増さんが姿勢正しく右手には日本刀を持ってたっているということだけだった。影を落としたような感じでこれまで一緒に生活してきたおじいさん……という雰囲気などどこにもなかった。あるのは殺伐としたつめたい空気だけ。

「やはりというか……霜崎家のものが手助けをしておったとはな」霜崎さんを一睨みし、今度は僕へと視線を向ける。その目には優しそうな瞳をしていた漸増さんの瞳などどこにも無かった……いや、もしかしたらこちらのほうが事実なのか？

「あれだけ偽の情報を与え、自分が鬼であるという虚実さえも認めさせたのに……どうやらわしの配慮が足りなかったようじゃな」

「ちゃんと天道時君の友人関係を調べておいたほうが良かったんじゃない？漸増さん？」

僕が何か答える前に彼女はあっさりと返答した。その瞳には余裕のためかどうかわからないが微笑がたたえられている。

「小娘が……いいよるわい。やはり木曾家に相對する霜崎家の血

をその身に受け継ぐものじゃ……………」

「漸増さん、何故、僕らの行方を阻もうとするんですか？」

不思議に思っただけだ。それを口にするのだが、漸増さんは霜崎さんのほうを見るだけだった。

「ほう、霜崎家の連中には教えられていなかったのか……………」

「……………」そりゃまあ、木曾家、霜崎家にとっては聞いておくべき話だろうけど天道時君が知ったところでどうするの？ 大体、あれってもう無効だっていったのはそっちでしょうに」

漸増さんは一つ笑ってからようやく僕のほうを見た。

「確かに……………」そうじゃったな。じきじきにわしからいいにいったことじゃったわい。いかなのう、年をとると……………」行方不明者が出るたびに木曾家と霜崎家は莫大な富を得る……………」と言っても、何も神様から施しを受けるといふわけではない。運がつくようになり、富豪になるなど軽いこと……………」わしはその欲に狩られし鬼じゃ……………」

「！？」

漸増さんの顔にひびが入り、その額からは二本の角が伸び始める

……………」

「……………」だからわしは反対したのじゃ……………」よもや、ここまで我が家の欲を、わしの欲を潰そうとしようとしているやからを家に置くなどと……………」ここで切り捨ててくれよう」

漸増さんは抜き身の刀をこちらへと向ける

「やゝれやれ、まさか人が鬼になるなんて……………」はじめてみたよ」

霜崎さんは懷から狐面を取り出してそれをつける。僕も陰の中から漸増さんが持っているのにそっくりな刀を取り出して構えた……………」説得するには相手は人の話を聞かない、相手の言っていることを認めるには僕にとって無理な話だった。

「さて、鬼にどれほど通用するか……………」この技、試してみようかな？」

「……………」

僕ら二人は目の前の漸増さんと相對する。これから二人を相手に

するのにとても余裕の表情を見せている。

霜崎さんは懷から何かの紙を取り出すとそれを漸増さんへと投げつけ……その紙は嵐を廊下に巻き起こした。

うるさい風の音で耳が無力になってはいたが、すぐ隣にいた霜崎さんの言葉はしっかりと聞き取れた。

『……あのさ、天道時君……早い話私ら二人じゃあの鬼は倒せないと思う』

「え？」

驚いて隣の霜崎さんを見るが、狐面の上からでもわかるが、きつと不安そうな表情をしているに違いない。

「えっと……じゃ、どうすれば？」

『いつてなかったけどもう神様が眠る場所まで半分以上来てるわ。えっと、具体的にいうなら四分の三ぐらい』

嵐は徐々に小さくなってきている。どうやらこの話を聞かれないように霜崎さんは嵐を起こしたようだった……ナチュラルに人間技とは程遠いね……いまさただけど僕の周りの人って変わった人が多い気がするよ。

『私が囷になるか、天道時君が囷になるか……どっちにしろここで漸増さんの相手をどちらかがしている間にもう一人が神様をおこすの。そうすれば“神の領域”と呼ばれる力が発動されてあの鬼を

……』

嵐は今では完全におさまっており、漸増さんが駿歩で五メートルはあったであろう間合いを踏破してきた。そして、その刀は霜崎さんへと降り注ぐ。慌てた僕は彼女と漸増さんの間に割ってはいいる。

「くっそう……！」

振り落とされた日本刀に“土蜘蛛”をぶつける。

「それなら、霜崎さんがいつて！」

『わかった』

至近距離でにらみ合う僕らを二度と振り返ることなく霜崎さんは去っていった。振り返ってくれなくて悲しかったが、今はそんなこ

とを言っている場合ではない。

「ほほう、このわしの相手をしてくれるのは木曾家の裏切り者が……」

「裏切るも何も、僕は天道時っていう苗字がある！」

漸増さんは僕から離れるとその右腕を光らせる。

「！？」

必殺技でもあるのだろうか……霜崎さんがやったみたいに……そんな感じで危機感を抱きながら僕は僕が握る刀に力をこめる。

「素人が達人に勝てると思ってか？」

「いや……それは出来ないってわかってる」

「ふふん、そうだろうな……」

当然の結果だといわんばかりに漸増さんは頷いたが……次に鼻を鳴らして不機嫌そうに僕に告げる。

「だが、今のお前とわしはほぼ対等。この鬼面をつけている間両者の間での実力は一緒なのだ……」

自らの刀を左手でさわり、今度は僕を見る。

「この刀の刃は自分の心で出来ておる」

「心？」

「そうじゃ、心……といっても、使えば使うほど磨耗し、いずれはその所有者もろとも消滅してしまうという代物じゃ」

それじゃ妖刀じゃねえか！？そうばやきそうになったのだが黙って相手の出方を見る。もしかしたら相手が僕の間隙を狙っている可能性も無いわけではないのだ。だが、相手はもう僕の相手をする気にならないのか刀を鞘におさめる。

「ふふふ、あの狐面の巫女を追いかけなくていいのか？神を起こせば確かにわしも終わりだが……その昔山にいた神は寝起きが悪く近くにいた者たちを一掃したらしい……わかるか？この無限回廊はそのためにあるのだ」

「……………」

つまり、霜崎さんがいう『神の領域』というものが発動すれば確

かに鬼となった漸増さんを倒すことは出来るのだがついでに霜崎さんも消滅する可能性があるってことか……

「さあ、どうする？ わしは何もせずにこの道を譲ってやろう」

そういつて廊下の脇へと移動する漸増さん。

「くっ……」

僕は目の前の漸増さんをもう見ることなく全速力で霜崎さんの元へと向かった。

「せいぜい犬死しないようにがんばるがいい……」

はつきりいつてあの鬼を外に逃がせば……このまま木曾家はずっと悲劇を繰り返すに違いないだろう……多分。漸増さんが何をしたかったのか、それさえわからないが……今するべきことは一つ！ とりあえず霜崎さんを止めることだ。

「やはり、青いのう……」

いまや軽々として脱出を図り始めていた鬼は一人ほくそ笑んでいた。

「じゃがまさか……あそこまでの実力を備えていたとは……奴にはこの鬼面の法則が通用していなかった……今摘まねばいつかは摘まれるかもしれんが今は逃げの一手じゃ……」

そんな鬼の目の前に一人の人間が待ったをかけた。

「おっと、そうそう逃げ帰らなくてもいいんじゃない？ 嘘についてまで帰らなくても……ね」

「おぬしは……たかだか人間の子どものくせしてわしの前に立ちはだかるとはいいい度胸じゃ、ここで切り捨ててくれよう」

刀を手にしたはずの鬼だったが、その手に刀は無かった。

「お？」

正確には、右腕そのものがなかった。

「きちんと手はにぎっておかないと……ほら、右腕おつことしちやったでしょ？」

「く……」

「ほらほら、いつの間にか体が……」

無限回廊入り口に確かに二人の人影があつたが……今では完全に一人の影しか見受けられなかった。

「やれやれ、年をとつても強いつて噂の鬼だつたと思つただけど……ま、そんなことはどうでもいいか……あとは君たち二人にまかせるよ亜美、時雨君」

無限回廊と名づけられた場所に背を向け、彼は指を鳴らした。そして彼は姿をくらまして……後に残つたのは血なまぐさい風だけだつたのである。

無限回廊の果て、僕はようやく霜崎さんを見つけた。そこは一つの教室のような場所で中央には光り輝くお札が貼られており、祠まですべて置いてあつた。後一步のところ……というところで霜崎さんは祠のお札を引き裂き、祠の扉を開けた……

「だ、駄目だ！霜崎さんっ！……！」

ただ、僕の声だけがむなしく響いたのだった。

第九話 ふふ、無力だね（前書き）

次回、所用で飛ばしていた話を載せます。

第九話 ふふ、無力だね

第九話

僕は霜崎さんを気がつけば突き飛ばしていた。

「きゃっ!」

「はぁ……………はぁ……………ぐばっ!」

そして、さらに僕は右のほう……………祠がおいてあるほうからの強い衝撃によってそのまま吹き飛ばされ、壁に思い切り衝突。物理的なダメージよりも何か精神的につらい一撃を食らったような気がした。
「うっ……………」

ふらふらになりながらも立ち上がろうとして……………壁に寄りかかったはずの僕の手がそのまま壁を貫通。気がつけば僕は廊下に立っていた。

「あ、あれ?」

慌てて部屋に扉から戻ると……………そこにはもう一人、僕がいた。まばゆいばかりのオーラのようなものを纏っている。存在するだけで僕ら二人はたつことさえ許してもらえない……………そんな威圧感も彼には存在していた。

「て、天道時君が……………二人!?!」

膝をつきながらも目の前の相手を確認する霜崎さん……………僕にいたっては地面に顔をのめりこませているような状況だった。

「……………」

「……………」

いや、よくよく見てみれば目の前のぼくは目つきが鋭い上に……………自分で言うのもなんだが、かつこよかった。

「ふう、久々の復活……………これはよい体を手に入れた……………おい、狐よ……………これにていく数十年間縛り続けていたおぬしの呪縛を解き放ってやろう……………」

目の前の僕は指をぱちんと鳴らし、それに呼応するかのように霜

崎さんが持っていた狐面は狐となって空へと昇っていった。

それを確認すると今度はこちらを見て……

「さあ、狐を追って消えるが良い」

「え？」

僕の顔から何かが昇天し……僕はなんとか膝をついた。圧倒的な存在感、いるだけで周りのものを押さえつけ、絶対的な力を誇示する存在……直感的に感じたが、これが人と神の超えることは出来ない壁だともいうのだろうか？

「ふむ、これまでの茶番をようやく終えたか……これから先、二人とも我につかえるが良い……と言っても、その娘だけで充分だ。お前にはもう、半分ほどとはいえ、このすばらしい体を貰ったからな……さらばだ」

目の前の僕が行ったことといえば霜崎さんの手を掴むと彼女が何かを言う前に僕の前から姿を消したのだった……後に残されたのは普通の教室と、なんだかゆれ始めているという事実だけだった。既に体に力が入り、自由に体を動かすことが出来ていた。

「と、とりあえず逃げないと……」

僕は慌ててその場から逃げた。後ろのほうではあの教室から崩壊が始まっているのか、祠が崩れるような音が聞こえてきたのだった……消えてしまった霜崎さんのことを思いながら……

無限回廊が完全に壊れると同時に僕は校門の前に立っていた。昨日と同じようにこの場所にワープしてきたのだろう。

「……いないか、やつぱり」

てっきり校門前にもしかしたら霜崎さんがいるのだろうと思っていたのだが……それは間違いだったようだ。

「やあ、時雨君じゃないか……奇遇だね？」

声のしたほうを振り返るとそこには……

「剣治……何してるの？」

何故か剣治が頭からアスファルトの道にめり込んでいたのだった。

頭の部分が完璧にめり込んでいるというのに何故か、声だけは聞こえてくる。

「見ての通り山の神様に挑戦したんだけど……まさか、時雨君の顔で来るとは思いもしなかったなあ……見事にやられてしまった、うんうん」

めり込んだままで胡坐をかき、体を上下にさせることでどうやら頷いているようだった。見ているとなんだか気持ちが悪くなってくる気がしてくる。

何とか気持ち悪さをこらえて目の前の剣治に僕は尋ねる。無論、たずねることはあのことだけだ……

「……じゃ、じゃあ霜崎さんとも会ったの？」

「それは……」

黙りこむ剣治に僕は続ける。

「どうなの！？あつたの？霜崎さんに会ったの？」

両足を掴み前後に揺さぶる。ぎりぎりという音が聞こえてきたような気がしたのだがそんなことはかまわなかった。

「いいかい、時雨君……彼女はとくに狐面の使い手になる前から神様に使えるって決めていたんだ。君が亜美を助けようとする気持ちはすばらしい友人愛だといっていいだろう……だが、それは亜美が決めたことを君が潰そうとしているということでもあるんだ」

「……」

「それに、今はその体をどうにかするのが先決だと僕は思うね」

「………そういえば……」

改めて体を見ると若干透けていた。剣治は自力でアスファルトから頭を引っこ抜くと僕に触ろうとした……が、剣治の体は僕を突き抜けていった。

「ほら、これじゃ色々と不便だろう？亜美のことは忘れるんだ………といたいけど、君の心の中だけでも絶対に亜美のことだけは忘れないで欲しい」

その瞳は強く、まっすぐしたものだ。何か意見することなど

出来ない。

「……………霜崎家の家系には既に亜美という女の子の存在はなくなっている……………戸籍にも存在していないからね。だからさ、君が覚えてくれない限り、彼女がこの世にいたっていう証明はないからさ……………よろしく頼むよ」

剣治は僕に頭を下げた。

「……………勿論だよ」

「それはよかった……………あのさ、また明日……………僕の家に来てくれないか？」

剣治は僕にそう告げる。

「え？まあ……………いいけどさ」

「そうかい、それは良かった……………木曽家では君を探しているそうだよ。すぐに帰ったほうがいい」

剣治の周りにいきなり風が吹き始める……………

「ああ、そうだ……………また何か僕の力が必要になったときは名前でも呼んでくれよ。そうしたらまたいつか会えるだろうから……………」

「え？」

気がつけば剣治は消えており、残されたのは僕ひとりだけとなった。胸に去来すものは静かな虚空の塊だった。

「……………霜崎さん……………」

僕がすべきことなど、何一つ無かったのかもしれない。助けに行ったのに、助けることが出来なかった……………そう、例え神に仕えること……………それが彼女が望んでいたことだったとしても……………前に霜崎さんから聞いたことにはとても名誉なことらしい。そりやそうだ、神様に仕えるのだから……………だけど、納得がいかない僕は……………

「とりあえず……………戻ったほうがいいかな」

今学校に行っても勉強なんて頭にはいることはないだろう。そんなことを考える余裕などなかった僕はいわれたとおり木曽家に向かって歩き出していた。

「こ、これはどういうことですか!？」

気がつけば僕は僕をいつか抑えていたおばあさんたちに捕まっていた。僕の周りには四角い壁が出来ており、何故かそれを貫くことは出来ない。

「……………神の始末じゃ」

「か、神って……………」

僕の呟きに反応したのかなにやら呪文を口にしていた一人の老婆が……………この老婆は僕が質問をしたときに答えてくれた人だった。

「神を見たものをこの木曾家に入れることは出来ん決まりでなあ…

…お主が向かうのはほれ、そこじゃ」

先にあるのは禍々しい池だった。

「……………」

「さらばじゃ……………なあに、おぬしはこの木曾家に巢食う鬼を退治してくれたという実績があるからのう……………手荒な真似はせんから……………だが、同じようにしてこの木曾家に破滅をもたらすかもしれない……………」

手荒な真似はせんといいながら……………池に落とそうとしているんじゃないか!?!という言葉はのどまででかかったのだが相手はどうせ聞く耳を持っていないのだろう……………そのまま僕を池の中に落とそうとする。

「ちょ、ちよつと何してるの!?!」

「ほ、焰華ちゃん……………」

驚愕のまなざしでこつちを見ているのは焰華ちゃんだった。早退してきたのだろうか?その肩には学生鞆がかけられている。

「ふむ……………焰華か……………何しに来た?邪魔をするなら一緒にいれてしまうぞ」

「そこって悪い人を閉じ込めるって場所じゃない!時雨君が何をしたっていうの!?!」

しかし、焰華ちゃんの言葉に耳を傾けようとはしなかった。かすかに見えた希望は絶望へと変わっていく。

「ほれ、進まんか……………」

四角い箱は僕を包んだまま……………そのまま池に入れようとしていた。

「駄目だったら！」

「こ、こら焰華！？」

焰華ちゃんは僕を包んでいる四角い箱に飛び移った……………こんなときにも思っただがめちやくちゃ行動派なんだね……………そんなことをやはり言っている場合ではなかった。あせったのは何もあのばあさんたちだけではない。

「焰華ちゃん！いけない、離れるんだ！」

このままではまずい……………霜崎さんに続いて焰華ちゃんまでよくわからんことになってしまう……………

「つて、うわあああああ」

「きやあああああ」

だけど……………だけど気持ちだけでは何もすることが出来ず……………僕は透けた白い体のまま、そして焰華ちゃんはダイレクトに禍々しい池の中へと墮ちていったのだった。

墮ちていく黒い池の中……………

無力を知った僕は力を望んだ……………

たとえば、そう、僕が何も出来ず、このまま落ちようとも……………

霜崎さんのときみたいに何もせずに誰かが僕の目の前から去られるなんて……………

それだけは絶対に許せなかった……………

だから、力が欲しかった……………

対抗できる力……

望んだ僕に今できることは……

けど、何一つしなかった……

ただ、僕はこうして堕ちていくだけの存在だった……

第四話 さて、人はどこまで進めるんだろうね？

第四話

「時雨君、何か僕に聞きたいことってないかい？」

あれからもう一週間がたっていた。何をすると言うわけでもなく、いつものように僕は生活していた。今日、珍しく剣治が放課後に僕を屋上へと誘ったので僕はおとなしくついていくことにした。その真意は謎だが、どうせ剣治のことだからどうでもいいことなのだろうと思っていたのだが、そうではないと僕の中の何かが警告をしている。

「…………… 剣治はずっとここに住んでたんだよね？」

「まあね、生まれたときからこの町から出てないってわけじゃないけど毎年の殆どはここで生活してるね…………… この町には面白い話があつてねえ…………… 聞く人によって内容が変わるんだ。狐と鬼のお話…………… してあげようか？」

「…………… うん、教えて欲しい」

じゃ、しゃべりますかね」と剣治は呟く。

「ああ、はじめに言っておくけどあくまでこれは僕が知っている話だからね。信じる、信じないは君の勝手さ。無論、さっきも言ったけどこの話は話す人によって内容が変わる…………… その昔、この村には狐が住み着いててね、これがまた、変わった狐なんだ。その狐はある日、山の中に入ってきた女性を驚かせて遊んでいた。だが、その日は雨が降った次の日だったから女性はあやまってがけ下に落ちて死んじゃったんだよ」

「…………… それで、どうなったの？」

「さすがの狐も罪悪感を覚えたのかな？このままではまずいつてことで…………… 山の神様にどうかして生き返らせて欲しいって言ったんだそうだ。山の神様は別に人間とかには興味がなかったんだけどちょうどこのまえ狐に祠を壊されて頭にきていてある条件を出した

んだ」

「……………ある条件？」

剣治はどこから狐面をとりだすと僕に投げつける……………いいのだろうか、結構年代物でさらにいわくがついているような代物のような気がするんだけど……………。

「代々その家と村を守り、面となつてその家系を見張ることだつて山の神様はここの土地を守るのに疲れたらしいんだけどね。それを狐に代わりにやつてもらおうとしたんだそうだよ……………それ以降、村に何か魔物が入り込むたびに狐は張り切つて家系と村を守り続けたんだ。けど、ある日……………一瞬の隙をつかれて狐面となつていた狐は鬼にのつとられたんだよ。よわうちいつてわけじゃない狐は狐面の状態でも狐面をつけていた少女の中に鬼を封じ込めたんだ。だけど、鬼はそれでも暴れてしまう……………こまつた狐は狐面の一族のとある侍を村に呼び寄せて退治してもらつたそうだよ、自分とともに……………だけど、これで話は終わらなかった……………まあ、今でもこの町には鬼がいるんだつて話だよ。お互いがお互い、狐面と侍は今でも相手のことを鬼だとおもっているんだ。実際のところはその問題となつていた鬼、滅んじやつてるんだよ。残っているのは思念だけ……………けどまあ、それが一番厄介なのかな？それさえわかればこの町は平和になるんだろうけどね……………」

剣治はそういつて立ち上がると首をすくめた。

「これでおしまい……………たまにさ、数年に一回ぐらいの割合で行方不明者が出るつてことがよく予想されるんだけど……………先に言つくよ、今年鬼面をつけた人は既に鬼が存在しないことを知っている。だから、へたに手を出さない限り行方不明になることはありえないと思うね」

「ねえ、剣治、実はさ……………」

僕はこの男になら信じられなかったことを話しても大丈夫なのではないかと思えた。だが、剣治は首を振つて僕がしゃべるのを制した。

「何を言うのかはわからないけど言葉って物は伝染するんだ。その言葉に何か重大な意味がこめられていてそれに僕が気がついてしまったら……………どうなるとおもっ？」

「……………ごめん、わかんない」

ため息一つ、若干呆れ気味の表情で剣治はどこから取り出したのかわからないが美少女フィギュア（女子高生、婦警さん、メイドさん）を屋上に置く。

「ここに、事件を目撃した女子高生Aがいました」

「うんうん、それで？」

「で、その日の夜に脅迫電話がかかってきたのです。内容は『今日見たことを言えばお前を殺す』と……………それで、彼女は事件のことについては知らないといっていました」

「うん、そんで？どうなったの？」

「彼女は言いつけを守っていましたが、信用できるメイドさんにそのことを言ってしまう……………そして次の日、女子高生が殺されているのが発見されていたのです」

そういつて女子高生のフィギュアがゆっくりと倒される。

「さて、この女子高生をころした犯人は誰でしょう？」

「え？メイドさんじゃないの？」

「正解……………まあ、実際のところは誰も彼女がメイドさんにしゃべっていたというところを見てないから確証がないんだけどね」

そういうと剣治はフィギュアをすべてなおしたのだった。とても簡単な話だった……………名探偵が出る幕はなさそうだ。

「つまり、君が信用している中に犯人がいるかもしれないってことさ」

「……………あのさ、婦警さんのフィギュアを出した理由は？」

「君、一瞬だけこの七尾さんのことを事件に関係している人だっておもっただろう？」

そりゃまあ、普通はおもうだろう。あの婦警さん（七尾さん？）がいたのは単なる偶然ではないとおもったのだが……………

「疑うのは君の自由だけど、今の七尾さんみたいに見た目はとてもその物事に関係あるかも知れない……………けど、実は関係ないってことが良くある。『鬼渡し』だってそうさ。間違えた人を侍が鬼だとおもって切ってしまったえば狐はその侍のことを鬼だとおもって切ってしまう。君が勝つべき相手は君自身さ……………所詮人間は鬼にはなれない。近づくことは出来ても……………ね。『鬼渡し』にはルールがあるといわれているけれどそれ自体だって無いに等しいんだよ。鬼さんが誰かを切ればそこで鬼さんは終わりってことは変わらないけどね」

剣治はそういつて屋上から去っていった。

「……………」

剣治が言おうとしたことをきくと僕は理解などしていないに違いない。わかったことといえは僕は誰も切ってはいけない、いない鬼を切れば再び鬼が侍に取り付いたと勘違いをした狐が僕を殺す……………ということだろう。それならば、疑心暗鬼となっている狐と侍はお互いに極限状態まで追い詰められているのではないだろうか？

「……………」

僕の陰を見る。陰は静かにだが、確実にあたりを探っている感じがする。そして、僕の脳内に直接語りかけてきたのだった。

『におう、におうぞ……………鬼女のおいだ』

匂うと言ってもそれは陰のほうだ。僕自身が何か異臭を感じていると言っわけではない。におってくるものといえば夕食のカレーぐらいだろうか？

立ち上がってフェンスに手をかけて夕焼けを眺めていると人の気配を感じた。

「あれ？天道時君こんなところで何しているの？」

「あ、霜崎さん……………」

後ろに立っていたのは霜崎亜美さんだった。帰るところだろうか？手には鞆を持っている。

彼女は僕の隣に立って同じように夕焼けを眺めていた。

「んゝ夕焼けっていいねえ…………あれ？その狐面もしかして剣治に渡された奴？」

「あ？これ？うん、多分渡したまま忘れて帰っちゃったとおも…………明日にでもかえしておこうかな……………」

僕がそういうと彼女は頷いた。

「うん、それがいいとはおもうよ。その狐面、持ってるといいことないって言われてるし……………」

「え？マジで！？」

やはり、いわくつきのものだったのか…………剣治、そんなものを僕に押し付けるなよ！とまあ、そういういたかったが剣治はいないし、既に僕の顔面には先客が張り付いている。この狐面が顔にはりつくということは…………いわば眼鏡の上に眼鏡をつけるというおかしい状況に陥るということで、さすがにそうはならないだろう。

「その狐面さ、つけているんなところを見ると変なものが見えるんだって」

「へ、変なものって？」

そうだな〜と呟いて彼女は言った。

「とりあえず、人間以外のもの。人間が見えなくなるっていう噂もあるね」

何故そんなに嬉しそうなんだろう？

「…………え〜と、何でそんなに嬉しそうなの？」

「あ、私こういった話大好きなんだ 天道時君は？」

さあて、どう答えたものだろうか…………もしかしたらこの狐面についていいことが聞けるかも知れないし、鬼面のことについても色々聞けるかもしれない。

「うん、好きだよ 剣治がいつてたけどこの町にもなんか怖い話があるんだって？」

僕がそう尋ねると彼女は目をきらきらさせながら頷いた。生き生きしているという言葉がぴったりである。

「うん あるよ！教えてあげようか？それはね……………」

彼女が話してくれた内容と『鬼渡し』については剣治とさして変わらなかったが……最後の部分に彼女は付け加えた。

「この話ってさ、ホントのところ神様を起こさないと終わらないんだよね」

「え？どういうこと？」

驚いて彼女を見ると彼女は言った。

「狐がこの村を守り続ける限り未だに鬼が狐の中にいるっておもっている侍は狐を探し続ける。もとは狐って山の神様が寝ている間の代役だそうだから神様を起こせば狐はこの世から完璧に消えて侍もそれを追うようにして消えちゃうんだよ」

「ふーん？」

それにしておかしな話である。聞こうと思えばこうやって町の人に聞くことが出来るのだし、地元の人の方が郷土については知ってそうなのだが……それならば、何故行方不明者が続いているのだろうか？

「うーん？」

「あ、それとさ、この話は家に帰ってしないでね？この話、木曾家の人たちには秘密にしておかないといけないんだからさ……」

「え？そうなの？」

彼女は深く頷いていった。

「なんかさ、木曾家の人には絶対に教えちゃいけないんだって……ええと、狐を切る権利があるからこちらでも狐を守る権利がどつたらっていったかなあ？」

うーん、と唸って霜崎さんはそういった。

「じゃ、何で僕に？」

「だって天道時じゃん？木曾って名前じゃないからさ」

そんなものなのだろうか？とおもって僕はその日霜崎さんと一緒に帰り、途中で別れたのだった。

転校する前は女子と一緒に帰るなどという夢のシチュエーションなど想像もできなかったのだが、こちらに来て遂にこのときがやつ

てきたか！と思えたのだが……人生というものは一風変わったもので彼女が一方的に恐い話のみを連続してしゃべり、僕はいやな空気を味わいながら帰路に着いたのである。

第六話 おや、まだ朝はきてくれないようだね

第六話

「般若つて知っているかい？般若のお面……君がつけている鬼面はこれとはまた違った種類のものなんだけどね。般若のお面って実はあれ、女性の嫉妬心らしいよ」

僕にとってはどうでもよさげだが、それ関係の人たちには間違はなく常識である知識が丘の上にいる剣治が呟いた。

「崖つぷちの時雨君つてやつだね、これは」

ニヤニヤとした調子で剣治は僕を見る。その表情はまさしくネコがネズミをいたぶるというような感じの表情に違いは無かった。

「……剣治」

「ま、約束どおりここに來たつて言うことはとうとう集め始めちゃったかい？鬼さんたちを」

「鬼さんたちつて……」

剣治はふつとため息をつくと木曾さんちの方角を指差した。

「ん……そろそろ来るようだね」

「え？」

何か白いものが飛んできた。そして、目の前に現れたのは狐面をつけた巫女のような服を着た誰かだった。それは……僕の夢の中に出てきたあの狐面の人に背丈は似ていた……にいていないところといえば……言いづらいが、胸の部分。あつちは出ていたがこつちはその……控えめ？

『まったく、どこを見てるんだか……ちよつと天道時君？』

「あ……そ、その声つて霜崎さん？」

狐面をつけているから声がくぐもっていたが声には聞き覚えがあつてしかも、機嫌が悪いようだった、この狐面さんは……。

「ははあ、時雨君以前の……正確に言うつと亜美の先輩に当たる狐巫女さんを見たことがあるのかい？」

「狐巫女？」

「そうそう、まあ、確かに世間一般的な平均レベルよりも亜美の胸は劣る」

「劣ってない！」

狐面をはずして剣治を一睨み。しかし、剣治は黙ることなく再びしゃべる。その顔がにやりと笑っている。

「けどねえ、胸は小さいけど心は大きいんだよ」

「へえ……………ああ、それはわかる気がするな……………ごめん、前言撤回させてもらっよ」

恐ろしい睨みを僕にきかせて彼女は剣治のほうにも再び睨みを聞かせる。

「ほら！今はそんなことをいつてる場合じゃないでしょ！」

「ああ、そうだった……………実はね、時雨君。君、もうそろそろ行方不明になるかもしれないんだ」

「！？」

いきなりの行方不明予定宣言！僕は言葉を失って立ち尽くした。

「……………実はさ、これまで行方不明になってきた人は全員が全員、次の鬼面を自ら作ってあの家においてきたんだよ」

「……………どういう意味？」

たずねると答えるのは霜崎さんのほう。彼女は狐面を頭に引っ付けてため息をつきながら答える。

「実はね、私たちのほうもこれまでずっとそのことについて追いかけてきたんだけど……………この木曾家の人たち、これまで鬼面をつけた人たちのことなんだけどね……………彼ら、全員が自ら行方をくらましてきたの……………まあ、例外もあるといえはあるんだけど……………自ら行方不明になっているって私たちのほうじゃきいてるわ」

「え？」

自分から行方不明になるって……………なぜだろうか？そこにどんな理由があるのだろうか。

「天道時君の部屋にたくさん鬼が来てたでしょ？」

「うん、確かにたくさんいたね」

うじゃうじゃいた。きつとあの中にはレア物が混じっていた……と考えるのは少しおかしいことだろう。今はそんなことを考えている場合ではない。

「あれ、あそこにならずと鬼が増えていたならどうなるとおもう？ いずれ、鬼たちはあの家自体を実質的に取り潰しちゃうからね。それを知っていたからこれまで鬼面をつけていた人たちは家族のために人知れずいなくなっただんだよ。でもさ、何故か次の鬼面を作ってこないなくなるんだよ」

僕はそれを聞いて再び首を傾げるしかなかった。

鬼面が無い限りあの家の部屋を覗き込んでも別に害は無いはずなのだ。

あの鬼面がかけてあつて今は閉ざされている部屋の中には確かに何かがいる。

ただ、それを確認するには鬼面を着用してときどきとした気持ちで……ではなく、普通に覗き込むだけで見てしまったものは鬼を探して斬るしかないのだ。つまり、この話でキーワードとなっているのは鬼面なのだ。その鬼面を再び作るなんておかしい……鬼面がなければそれ以上悲劇は繰り返されないはずなのだ。

「それってどういう意味？」

そのようにたずねると剣治は眼鏡を少しだけ光らせて淡々と呟くように話し始めた。

「簡単に言つとあの家はあの鬼面が守っているっていいってもいいね。知ってる？人間にとつて酸素っていうのは毒なんだけどそれがないと人間は生きられない……あの家にとつてあの鬼面は絶対にないといけないものなんだ。しかも、不思議なことにその鬼面は作られてまもないはずなのに一年も過ぎればぼろぼろになつてしまふんだつてさ……まるで、これまでの鬼面がそこにあるかのようにね……結局のところ、鬼面をつけて時雨君が覗き込んだという部屋を見なければ木曾家は安泰そのものなのさ」

鬼面をつけた人が行方不明以前に造ったというのなら今僕に引っ付いている鬼面は焰華ちゃんのお父さんが作った鬼面ということになる。

「……………ん？じゃ、行方不明になった人たちはもしかしたらどこかで生きているってこと？」

鬼面を作っているのだ……………いや、それは行方不明になる前のことらしいが……………だが、とりあえずは逃げるだけだろうから死んでいないだろう。てっきり狐面をつけた人に殺されていたのだろうとおもっていたのだがそれもそれでどうやら外れていたようだ……………しかし、漸増さんに渡された本にはそう書かれていたような……………

「それは……………どうかな？ずっと鬼はついて来るんだよ、永遠に……………どこかでもしかしたらいき続けているかもしれないけど……………元は鬼面をつけた人は人間なんだ。忌み嫌っている鬼をずっと見たくないっておもっている人たちは自ら……………」

剣治はその先を言わずに首をすくめていった。

「……………とりあえず、今僕たちがするべきことはこれまで続いてきたこの悪い伝統を消すことだね。はじめのほうは確かに間違った人を切った人もいたよ。だけど、さすがに僕らの世代までにはどうやってこの試練というか、なんと言うか……………しいて言うなら神様のいたずらを克服するか既にわかっているんだよ」

「ああ、確かに言ってたね……………どうするの？」

僕の質問に霜崎さんが応答をする。

「それはね、山の神様を眠りから覚ませばいいんだよ」

霜崎さんはそういうと狐面をつけてどこかを見た。黙ってしまった霜崎さんを見無視するような感じで今度は剣治がにやっと笑っていた。

「……………その昔ね、神様の祠があった所は……………今じゃ学校になっているんだ。僕らの高校、そこが神様が眠っている場所なんだよ」

「！？」

何も言えずに剣治を見ると剣治の近くにいた霜崎さんとはつくに

姿を消していた。そして剣治は別にどこかにいくことも無く……暗闇を眺めながらいった。暗闇に何かいるとも思えない。

「何でまた、学校なんか建てたんだろうね？ 噂じゃ無理やり作って聞いたんだけどその筋じゃあの学校でもまれに人がいなくなっちゃうことが起きてるってさ。神隠しって奴かな？ だけど、これまで行方不明者が出てきたかもしれないが来年からはきっと行方不明者がいなくなるはずだよ……今年で最後だからね。だから、時雨君、君が特別ってわけじゃない。たまたま最後に鬼面をつけただけってことさ。それが幸運か不幸なのかどっちかはわからない。未来が見通せる人間なんていたらきっとその人は面白くないだろうからね。人は何のために生きているのか……実質、死ぬために生きているんだよ」

どことなく皮肉めいた言葉を残し、最後にじゃ、がんばってねとだけ言う。と剣治は闇夜にその姿を消したのだった。剣治がいった言葉を僕は完全に理解することは出来なかった。

「……結局は僕にこれから学校に行かって事なんだろう？ それに、最初のほうに言っていた僕がそろそろ行方不明になるって言う理由もまだ聞いてないんだけど……」

一人残された僕は急いでその場から学校へと向かって走り出した。近くにある森からは鬼さんたちが隊列を組んで僕に迫ってきているのだ。きっとコンビ二にたむろしている不良たちよりも見た目的にも実力的にも悪い集団が完成するに違いない。

そんなことになっては色々問題になるので僕は“土蜘蛛”を持って駆け出す。街角にまつている鬼に対しては問答無用で切り捨て

「……ぜえ……ぜえ」

何とか学校前には着いたものの、どこからも鬼たちは湧き出てくる。校庭、木の根っこ、近隣の民家の窓からお邪魔しましたみたいな感じで……

「一体全体、何体出てくるんだ？」

囲まれそうになって……空から助けがやってきた。霜崎さんは

あたりの鬼を何かを使つて一掃すると僕をお姫様抱っこする。

『…………… やっぱり、今回はどこがおかしいよ』

「え？おかしいって？」

不安そうな表情の（狐面をつけてはいるが）霜崎さんにお姫様抱っこをされていることを恥ずかしくおもうが、それよりも霜崎さんが口にした言葉のほうに気になっていた。

『大体はまだ一年ぐらい大丈夫なはずなんだよ…………… もうそろそろ最後だからかな？うん、大体、木曽っていう苗字の人以外が鬼面をつけたのも今回で初めてだし……………』

「最後つて…………… 大体、何でわかつたの？」

思えばおかしい話だ。

今回で最後だつて誰が言ったのだろうか？まあ、剣治は先ほどいつていたが…………… この件に関係している木曽家の人たちだつて未だに全体を把握していないようだったし、ルールブックはほぼ間違いないで焚書にしまつてもかまわないぐらいなのだ。それに有力な候補というか、鬼を斬ろうといった言いだしっぺの僕の陰の中にいる鬼面の侍だつて別に何もしゃべつてはいない。いつぞやはずつとしゃべっていたのにまったくしゃべっていないのだ、最近は。

僕の質問に霜崎さんはどうしたものかと考えたようだったが彼女は口を開いた。

『…………… 剣治だよ、剣治が言ったの。私の従兄で霜崎家の跡取り息子つてことになっているんだけどこれがまた、おかしい話なんだよね…………… なんでも知っているつて言うか、未来が見えている…………… そんな感じかな？剣治が生まれてからは事故も無いし、予想したことは全部剣治は当ててるから』

どうなんだろうか…………… もしかしたら未来が見通せるのかもしれないなと思えたのだが、僕はそれでもないような気がした。

「まあ、今のところは僕たちがすることって決まっているんだよね？」

「…………… どうだろ？今日中に山の神様が眠つているところまでいけ

なかったら明日もまた学校中を探さないといけないんだよ。明日でも駄目だったらそれこそずうっと……永遠に」

狐面をはずして僕を下ろす。

その目は真剣そのものでこれから先こうして深夜に学校に侵入して探さなくてはいけないのだ、神様を……今回で見つかればいいのだが、探して見つかるような神様ならばそれこそ十年ぐらい前には既に見つかっていそうなのである。そして、そんなことを考えていて気がつかなかったが、気がつけばそこは校舎の扉だった。

「さて、侵入しますかね………よつと」

どこからか細長い針金のようなものを取り出すと鍵穴につっこんでかちやかちやと鳴り響かせ………

「開いた」

「おおっ！」

あつさりと開いたので少々驚いたのだがこれはこれでいい。別に何かを盗みに来たわけではないのだからこのようなピッキング技術がすばらしいということは黙っておくことにしよう………僕は中に入り、あたりをきよきよと見回すがどこにも鬼の姿は無い。

「この学校、仮にも神様が眠っているからね………そうやすやすとよわつちい鬼が入ってこれるわけじゃないよ。無論、私と天道時君のどちらかが鬼だった場合でもそれは一緒なんだ。だから天道時君が鬼面をつけてやってきた次の日とつくにわかってたわけ。学校にはいれなかったらその場で成敗してたかもね」

「成る程………だから霜崎さんは僕のことを鬼だっと思っていなかったんだ………ん？でもそれじゃおかしいな………」

僕は以前、漸増さんの部屋に入ることが出来なかった。それは関係があるのではないだろうか？

「どうしたの？天道時君？」

「ん？いや………」

僕が言いよんどんでいると彼女はすっと近寄ってきて僕の右腕を掴んだ。とっさのことで放そうとしたのだが彼女はそれを許してはく

れなかった。

「……これから先は私たち二人がお互いのことを信頼しないと生き残れない……先代の狐面継承者とその鬼面をつけた人……つまり、焰華ちゃんのお父さんね。ともに学校まで来たって剣治がいったの……だけど、鬼面の人は……日を改めるっていったきり……そのままいなくなっちゃったわ」

その後、行方不明になったというわけね……なるほど、ここじや人の心も一瞬の迷いのせいでどうかなるってわけねえ……

「……あのさ、どうでもいいことなのかもしれないけど……実は僕、この前……っと、その前に漸増さんって知ってる？」

誰もいない校舎に僕の声が響き渡った。しかし、まだまだ夜は明けない。

第十話 ふふ、物語というものはいつか終わるものさ(前書き)

さて、今回で終わりとなってしまいました……今思えば非常に駆け足だったなあと思っています。

第十話 ふふ、物語というものはいつか終わるものさ

第十話

一人の少年が地下への階段を降りていた。

「まさかとは思っていたけどこれはいいことになったね……木曾家の人たちもんだお宝をみすみす手放すなんて……やっぱり、没落していく家系を見ているのは他家であつても心が痛いね」

その割にはあまり表情が変わりない言い様だつた。

「さて、僕が出来ることといえば何があるのかな？」

少年は地下室の扉を開ける。そこにあつたのはもう一つの扉だつた。

「さつてと……とりあえずあの二人がどうなつたのか……良く見ておいたほうがいいかもねえ……土蜘蛛、ようやく君の主を見つけてあげることが出来たよ、いつてくれ」

少年は暗がりへと視線を飛ばすが、そこから返ってきた返事は文句を言つたのだつた。

「えゝ剣治、何言つてんだよ……これから俺はデートなの。野郎の相手をしている暇なんてないんだよ……第一、俺の主は女の子じやなかつたわけ？」

「残念だが九割がた女性つていったよ。一割は男の可能性だつてあるつて言つただろ？」

「ちつ、どうせお前のことだから実は九割男だつたんだろ？」

「さあ？それはどうだろうね」

剣治は答えずに扉を開ける。

「さ、急いで行つたほうがいいよ」

「いやだね俺にも何かいいことがないと却下だ」

「じゃ、予報してあげよう。彼と一緒にいると絶対に美少女、美しいお姉さん方と会うことが出来る」

その言葉に陰から嬉しそうな返答が帰ってくる。

「ほ、本当か？」

「ああ、本当だ……今度は嘘をつかない」

「よしっ！乗ったぜ！じゃあな」

「ああ、思う存分エンジョイしてくるといいさ」

陰の主はすばやく移動するとすぐに扉の中に姿を消したのだった。そして、残されたほうの少年は今度は別の部屋の扉を開ける。そこには『零式』とかかれた鉄の棺桶の様な物があつた。棺桶内には管が通されており、時折聞こえてくる息遣いが不気味さを漂わせている。

「……………さて、どれほどの力を発揮するのかな？時雨君、ぜひとも僕にその成果を見せて欲しい……………」

陰の主が消えた扉にその鉄の棺桶を入れ込む。棺桶に変化は無く、素直に入り、姿を消してしまった。

「……………じゃ、僕もそろそろ行く準備をしないとね……………」

そして、最後にその扉に入っていったのは謎の少年だったのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0054f/>

夢の生まれる場所、心龍の目覚め

2010年10月8日15時33分発行